

# 豊かな感性を育む音楽づくり

## —第4学年「水のぼうけん」—

真 田 美智子

### 1 豊かな感性を育む音楽科の支援

豊かな感性を育む音楽科授業にとって必要なものは何か。

第一に、気づき、感じ、表現するのは児童であるということの再認識である。ともすれば、児童に美しさを感じとらせようとしすぎるあまり、教師の感じ方を押し付けてしまうことがある。教師の感じ方を素直に表現することも大切であるが、児童の感じ方や表現を無視したりすることのないようにしたい。教材や活動のために児童がいるのではなく、児童のために教材や活動が用意されるべきである。

第二に、その児童の感じ方や表現を大切にしながら、さらに感じ方や表現を深めたり高めたりする手だてを講じることである。指導者は、一人一人の子どものよさを見いだし、支えていく役割を担っている。指導者のことばかけ、次の指導への方向付け、児童の実態把握を充実させて、より高めていくための手だてを講じる。

ここでは、指導事例—水の冒険の音楽づくりを通して、豊かな感性を育む授業に迫りたい。

### 2 指導事例—「水のぼうけん」の音楽づくり（4年生）

#### (1) 題材について

中学年になると、音楽に対するイメージや自己表現の意欲も次第に高まってくる。また、音楽の構成を感じ取ったり、音楽の表現を協力して工夫したりするなど、主体的な活動や集団で協力する傾向が見られる時期でもある。このような子どもたちの要求に応じるためには、自ら感じ、考え、発見し、表現し合う自己表現活動を取り入れることが必要である。

本題材では、水を素材として、そのぼうけん旅行を想像し、その中で起こる出来事や自然現象を音楽で表現することを主な活動と考えている。子どもと音との関わりを大切にしながら、イメージをもって自分なりの音楽をつくり出す楽しさを味わわせたい。

子どもたちは、これまでに、曲の感じに合った表現の工夫（はずんだ歌い方やなめらかな歌い方）や曲に合った音選び（打楽器による）などの経験があるが、本題材のような音楽づくりは初めてである。従って、互いの子どもたちと音との関わり（感じ方や工夫）が生かせるように音の素材はできるだけ少なくしたい。

豊かな感性を育むために次の指導目標を、学習過程においてどのように具現化し、達成することができたか、子どもの表現の状況や発表などから分析し考察したい。

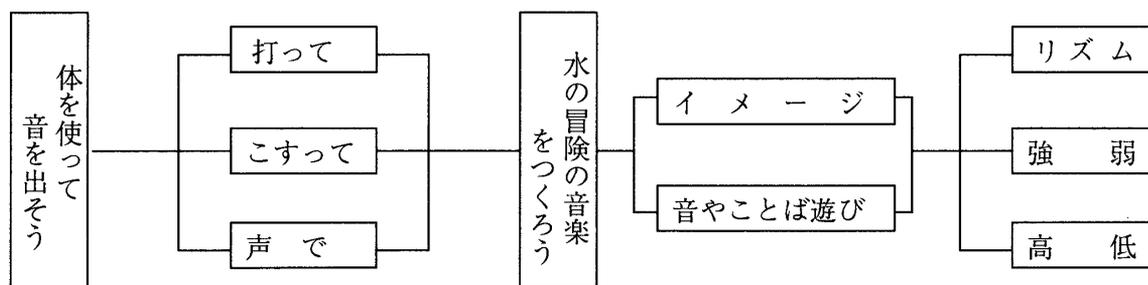
#### (2) 指導目標

- ① イメージをもとにして、自分たちの音楽をつくり出す楽しさを味わうことができるようにする。
- ② 自分の表したい音を工夫して表現することができるようにする。

(3) 指導内容と計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8時間

第一次 (3)

第二次 (5)



(4) 指導の流れと支援の手だて

	ねらい	主な学習活動	支援の手だて
第一次 ③	体を使って、いろいろな音を工夫する。	○「打つ」「こする」などの方法で、いろいろな音を出す。 ○「声のエレベーター」など、声を使った音遊びをする。 ○声による音遊びで、絵をかく。	・体を使ってつくる音で、音あてゲーム等を取り入れて、意欲化を図る。 ・発見した音やつくった音を互いに聴き合う場を設定する。
第二次 ⑤	音探しをして、身近な音に関心を持つ。  グループで、「水のぼうけん」の音楽づくりをする	○学校の中で水の音を探す。 ○水の音を聴いてメモする。 ことばや図で ○探した水の音を発表し合う。  ○グループで、水の冒険旅行のイメージを話し合う。 ○話し合ったものをもとにしながら、水の音を声で表現していく。 ○自分たちのイメージに近づくように、ことばやリズム、強弱、高低などを工夫する。 ○グループの表現を聴き合い、よりよい表現に工夫する。	・天候を考慮して、音探しをする。 ・紙を丸めた物（メガホンのようなもの）などを用意し、音をより聴きやすくする。  ・子どもたちが探した水の音を使いながら、簡単な水のお話作りをしていく。 ・話しあったことを、絵やことばで表して、イメージを焦点化していく。 ・音楽づくりのポイントを明確にする。(ことば、リズム、高低)

(5) 水の音探し・・・・・・（雨の音）

音楽の時間は雨だった。そのため、学校の雨の音探しをすることにした。

まず、教室の中で雨の音に耳をすますと、いろいろな音に聞こえてきた。人によっても、雨の音の言い表し方が違う。学校のいろいろな場所でも、音が違って聞こえそうである。こうして、学校の雨の音探検が始まった。1時間で子どもたちが探検してみつけた音をまとめると、次のようになった。

ザー	ジージージー	ポタ	ズバー
サー	シャー	プチ	スースー
ポツ	ヒヤー	パチッ	チョポチョポ
ポタポタポタ	ポタッ	ジュウジュウ	チュポン
ポッタンポッタン	ペタ	ジャージャー	ドボドボ
カー	ポトポト	ザーーーー	ジャボー
シージャーパタパタ	パシャ	パタパタ	ガジャー
イン	チャパチャパ	シーーーー	ゴー
パチパチ	ダー	タッポタッポ	ビチャンサー
カチカチ	ザザザザッ!	ザバザバ	ザバーザバー
シュバー	スー	シャポチャパ	ブアーーーー
パチカチ	ピシピシ	ビチュビチュ	ダーザー
ジャー	ピチャン	ポッチャンポッチャ	ザッザッ
ポトッ	バアバアー	ン	ザザザザ
チャポッチャポッ	ツポツポツ	ザバーザバー	ビチャン　サー
ボチャン	チーピーチーピー	スイー	プップッ
ザバー	ツツツ	ドーーーー	ババー
チッチッ	チャーチャー	ジャッポ	ペチャン

同じ場所で聴いても、音が違っていたり、同じ「ポトッ」でも強弱が違っていたりする。身近な雨から、様々な音の発見をすることができた。

#### (6) 「水のぼうけん」の音楽づくり

##### ① 指導にあたって

次は、いよいよ「水のぼうけん」の音楽づくりである。身の回りの水の音探しや、その水の冒険の物語の想像や話し合いをグループで行った。場面は、主に3場面とした。

音楽づくりにあたっては、次の点を授業仮説として考えた。

音の素材を限定し、表現の工夫において、ことば、強弱、リズム、高低などをポイントとして支援するならば、子どもたちは、表現を高めていくことができるだろう。

子どもが感じ、気づき、考え、発見して表現する音楽づくりでありたい。そのために、指導においては、自分の体で表現できる音（声もふくむ）を素材として、音の楽しさや工夫することのよさを感じ取らせたい。身の回りに音の素材は様々あるが、声一つにしても、音色、ことば、高低、強弱等、表現にむかって工夫できる点は多い。音の素材をできるだけ限定することで、音による表現の幅を広げていきたいと考えている。

音楽づくりの手順は、子どもたちと話し合いながら、次のように決めていった。

- 1) 自分たちのイメージに合う「音」を考えよう。
- 2) いろいろな表現のしかたで試してみよう。(リズムや速さ、強弱、高低)
- 3) 水の音以外に、あらわすとよい音をつけ加えよう。
- 4) グループで練習しよう。
- 5) 発表して互いのグループの表現を聴き合い、よりよいものにしていこう。

次は、第二次第3時における指導の実際である。互いのグループの表現を聴き合い、よりよいものにしていくための話し合いをした。

- ② 本時の目標　表したい音を工夫して「水のぼうけん」の音楽づくりをする。
- ③ 準備　録音テープ、グループごとの音楽づくりのメモ用紙

④ 評価の観点

音楽への関心・意欲・態度	「水のほうけん」の音楽づくりを楽しみ、進んで活動している。
音楽的な感受や表現の工夫	声を使ってイメージに合った表現の仕方を工夫している。
表現の技能	イメージに合った表現をしている。
鑑賞の能力	互いの工夫した点に気をつけて表現を聴き合っている。

⑤ 学習の展開

学 習 活 動	指 導 ・ 支 援 活 動
<p>1 リクエスト曲を歌う。</p> <pre> graph TD     A[リクエスト曲を歌う。] --- B[歌詞]     A --- C[歌の気持ち]     B --- D[ ]     C --- D     D --- E[ ]     </pre>	<p>1 音楽学習の始まりに位置づけている。 毎時間積み重ねることで、愛唱歌を増やしていきたい。曲名は記録しておく。</p>
<p>2 グループごとに、水のほうけんの音楽づくりを工夫する。</p> <pre> graph TD     A[グループごとに、水のほうけんの音楽づくりを工夫する。] --- B[高低]     A --- C[強弱]     A --- D[リズム]     </pre>	<p>2 ◎同じ音の素材でも、強弱やリズム、高低によって感じが違ってくる。そのことに気づきにくいようであれば、聴き比べる場を設定する。</p>
<p>3 水のほうけんを発表し、聴き合う。</p> <pre> graph TD     A[水のほうけんを発表し、聴き合う。] --- B[グループごとの表現]     B --- C[表したいこと]     C --- D[工夫した点]     C --- E[うまくいかない点]     </pre>	<p>3 ◎発表を意味あるものにするために次の点に留意する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・工夫した点や、うまくいった点、うまくいっていない点を発表するように指示する。</li> <li>・見通しを持たせるために、発表の手順を示す。             <ol style="list-style-type: none"> <li>①グループの発表を聴く。</li> <li>②工夫などについて気づいた点を発表し合う。よいところは次に生かす。</li> </ol> </li> <li>・本時の発表を次時に生かすために、録音しておく。</li> </ul>
<p>4 本時のまとめをする。</p>	<p>4 自分たちの音楽づくりについて、工夫できたところ、うまくいかなかったところを確認させ、本時のまとめとする。</p>



### 3 考察

#### (1) 授業仮説より

表現の工夫において、ことば、強弱、リズム、高低などをポイントとして支援することにより、子どもは自ら表現を高めることができたか。

ことば、強弱、リズム、高低などを、表現の工夫のポイントとするために、次のような手だてを考えた。

- ① 強弱、リズム、高低を変化させて、聴き比べる場を設定する。
- ② 子どもたちが考えた「水のぼうけん」物語のようすのイメージをより広げるためのことばかけをする。

たとえば、次のようなことばかけをした。

「この時の水は、どんな気持ちかな？」

「雨は、たくさん降っているの？それともほんの少し？」

「大きい音がしているのかな。小さい音かな。」

- ③ グループでの練習や互いに聴き合う場では、自分たちの思いが表せたかどうかを振り返る。  
ジャー—、じよほじよほ、とっぷんとっぷん、ポー、じゅわーじゅわーなど、様々なことばの工夫が見られた。水の音を声による表現と限定したことで、状況によっていろいろなことばで表現することができた。

しかし、子どもたちの考えた冒険物語によっては、イメージが広がりやすく、子どもたち自身がイメージを持つことがむずかしいグループがあった。中には、「水のぼうけん」の音楽づくりの後で、「汽車のぼうけん」の音楽づくりに発展させたグループもある。しかし、身近な自然現象から空想の世界まで、冒険物語の内容が多岐にわたることで、グループによる満足度の違いが見られ、音楽づくりの楽しさを味わうことのできにくいグループもあった。

#### (2) 題材について

(1)からもわかるように、音楽づくりにおいては、次の点が重要なものとなる。

- ① 子どものイメージが広がるものであるか。
- ② 表現の工夫をすることで子ども自身に満足感や達成感があるか。
- ③ 表現の工夫のポイントが身につき、感じ方や気づき、表現が豊かになるか。

本題材では、「水のぼうけん」の物語を子どもたちがつくっていったが、同じ水でも、「しずくのぼうけん」という絵本をもとにして音楽づくりをする方法も考えられる。共通の話から、子どもたちそれぞれのイメージを出し合ったり、音を選んだり探したりして工夫することができるであろう。

